

4 ビハーラ僧養成研修会（仮称）【試行】の調査報告

「ビハーラ僧養成研修会（仮称）【試行】」修了者へのインタビュー結果

2017（平成29）年度開催の「ビハーラ僧養成研修会（仮称）【試行】」（以下ビハーラ僧養成研修会）研修会の修了者6人に対して、2018（平成30）年9月にインタビュー調査を行なった。修了者6人のうち男性が4人で、女性が2人、年齢は20代が4人、30代が1人、50代が1人であった。今回の修了者のうち、医療現場経験がある人が2人いた。

インタビュー調査は、修了者1名ずつに対して、ビハーラ活動推進委員会・企画研究専門部会部員1名が行い、インタビュー時間は1時間程度であった。

なお、回答については一部文言を訂正している箇所がある。また、スーパービジョンやKJ法などの専門用語については、巻末の専門用語解説一覧を参照いただきたい。

インタビューを以下の項目でまとめた

- Q. 1 ビハーラ僧養成研修会を受講して、どのような学びがあったか。
- Q. 2 臨床現場にどのように入って行ったか。
- Q. 3 どのようなことを実践してきたのか。
- Q. 4 困ったこと・負担となったことは何か。
- Q. 5 自身の助けになったのはどのようなことですか。
- Q. 6 やりがいを感じたのはどのような時か。

インタビュー結果を全て逐語に作成したのち、分析者が全て読み直した後、インタビュー内容に沿って抽出し、KJ法によって分析を行い、本論では、文章化したものを示す。

以下、まとめた大きな概念は【 】で示し、中程度の概念を『 』で示し、ビハーラ僧養成研修会修了者の解答そのものについては、「 」で示す。

「Q. 1 ビハーラ僧養成研修会を受講して、どのような学びがあったか」は、以下のような5つの結果が見られた。

1. 【現場の前の座学による学び】
2. 【現場に出ることによって、初めて気づく学び】
3. 【自分自身の価値観を振り返る厳しさの中の学び】
4. 【受講生仲間によって支えられ、それぞれの多様な考えからの学び】
5. 【実践方法についての様々な学び】

1. 【現場の前の座学による学び】では、『現場を想像できずに、ただただ勉強していた』という回答があり、具体的には、「座学の際に思っていたのは、現場のことを私は何も知らなかったもので、現場を想像ができない」との回答にもあるように、現場のことがわからないまま、ひたすら勉強している修了者の姿がうかがえる。

一方で、『座学の中にも学びがあった』とする回答もあり、具体的には、「ビハーラ僧がどのような立ち位置で周りから見られているのかということや、どのようにコミュニケーションを取っていたのかということや、雰囲気という言葉で伝えてもらいました。立ち位置や、言葉遣い」と述べたように、座学からどのように対応するのが適切なのかを学び、一層、研修意欲があがっていることも読み取れた。

また、『実習に出て初めて座学の大切さに気づく』とする回答もあり、具体的には、「実際に実習を行うと、座学で難しいなと思っていたところがすごく役に立った」という回答も見られた。

修了者によっては、現場が想像できずに必死に座学から学んでいるが、それは現場に出て初めて、よりリアルな情報・知識として活用されている姿が想像される。修了者の思いとしては、実際の現場に少しでも最初に触れておいたほうがいいのではないかと、という声も聞かれた。

2. 【現場に出ることによって、初めて気づく学び】として、『現場で何もできなかった』とする回答があり、具体的には、「そもそも、プリントを暗記したぐらいで活動が完璧にできるとしていなかったが、それ以上にできなかった」などの声があり、現場の厳しさに直面したようである。

また、『医療職・福祉職との連携の難しさ』についても実感し、「医療職とほぼ関わりがないので」と、コミュニケーションの難しさにも直面したとのことであった。

3. 【自分自身の価値観を振り返る厳しさの中の学び】として、『自分を振り返ることが辛かった』との回答があり、具体的には、「どのような気持ちになったのかということや聞かれることが辛いと思いながらも、大事なことなのだろうなという実感はあった」と感じていたようである。自分自身の実践について考えるということは、医療現場等々の経験がある者でも日常的に行なっているのではないので、心理的な辛さがあったようである。

その中でも、『自分自身を見直すことになった』と前向きに考え、「自分の癖や、ほかの人の癖に対する自分のリアクションというのが、現場においても、普段の生活においても、同じことを繰り返しているはずであるので、そこをケース、サンプルとして抽出して、自分の中で再確認や、再認識をしていくという作業をする必要があると思う」と日常から、自分自身を見直すきっかけになったという意見も見られた。

また、『医療と宗教の視点の違いが明確になった』との回答があり、「医療者目線では僧侶は務まらないので、その見方を変えてくださった。それは今までの自分にプラスとなり、いい意味で教えてくださったと思う」など、よりよく改善したり、治療するために行う医療的な関わり方とは異なることへの気づきがあったとの声もあった。

それらは『これまでの自分の価値観でないもので動く難しさ』との表出もされており、「よくなっていくのが善だという教えではないので、そのような部分でよく考えさせられた。どちらも自分は持っていないといけない立場なのかなということも考えさせられた」という宗教者と医療の中での実践の葛藤を抱えながらも、研修を積んでいったとのことであった。

4. 【受講生仲間によって支えられ、それぞれの多様な考えからの学び】との回答があり、「集まってみんなで話し合うときに、ほかの人が言われていることが、自分にもあてはまるという場面があったり、直接自分に言われているのではないが、人が言われるのを聞いて、気づくというか（中略）その実習のことをみんなで共有したり、話し合うことが良かったのかなと思います」など、話し合うことによって、学びが深まったとのことであった。
5. 【実践方法についての様々な学び】は、多様に回答されており、『感情に焦点を合わせた対応が難しかった』『相手の背景についてより深く知ろうとするようになった』などの傾聴に関する学びがあったり、『仏教的な問いに表面的に答えようとすることへの気づき』また『それぞれの現場によって動き方は全く違う』などの、気づきがあったようである。

「Q. 2 臨床現場にどのように入っていったか」は、以下のような結果が得られた。

6. 【宗派関係・専門職・もともとの人脈からの就職】
7. 【施設の受け入れ方と活動者の入り方の違い】

6. 【宗派関係・自らのコネクション・専門職としての就職】では、『宗派関係の就職』として、宗派の職員が調整した結果、就職が決まるという形が挙げられる。

一方、『看護や福祉の専門職としての就職』をした修了者もあり、看護師としての就職活動を行った修了者もいた。その中で、『就職先の選択の難しさ』があり、「病院の母体となった、トップが仏教に興味があり、臨床宗教師も受け入れておられる病院なのですが、でも看護部長も含めて看護スタッフさんは、全くその人たちに対して興味がない」といった、運営側と現場スタッフの解離が見られる現場があったり、「もう一方は、宗教者を入れるかどうか、そのようなことは全く今のところ考えておられないような病院で（中略）その病院特有というか、認知症の患者さんが多くて。活動しようと思えば、おそらく、たくさんできることはあると思います。でも何かしらの理由で看護業に流されそうで、自分は看護師の方がメインになってしまうのかなとか思ったりしました」のように、できる活動はありそうだが、看護師としての仕事になってしまうのではないかと危惧している姿が見られた。いずれの就職先を選ぶにせよ、簡単に活動ができるわけではないが、それぞれの現場でどのように実践していくのかは今後の検討課題である。

また、『もともと地元で医療関係の人脈があった』修了者もあり、具体的には、「もともと3年、4年ほど前から、医療系の方々とは、自分の父親としても、寺院としても親しいという状況であった。また、話し合いの場や講演会の場とかを作ろうといろいろなことをしていこうと考える中で、なおかつ、私が、ビハーラ僧の研修をうけているということを知って、それなら、あなたの息子さんに働いてもらえませんかという話になった」という内容を述べている。これは、修了者の自坊の住職が作ってきた人脈を活用できた事例である。このように、時間をかけて少しずつビハーラ実践の土壌を作っていくことも必要だと考えられる。

7. 【施設の受け入れ方と活動者の入り方の違い】として、『受け入れ態勢ができており、仕事の対応を任せてくれた』という場合もあれば、『引き継ぎがうまくいかず、自分の存在も周知されていない』という場合もあるようであった。

『受け入れ態勢ができており、仕事の対応を任せてくれた』では、具体的に「私が先生から言われたのは、話を聞いてあげてくださいという事だけであったが、それが、あとは、あなたの裁量に全てお任せします、という状況になった。訪問時間であったり回数であったりというのも、基本的に私に任せてもらっており、また、不都合が生じている状況でもないです」と、活動をしやすい状況にあることが語られた。これまでの関係者との信頼関係が醸成された結果、このような実践につながっていると考えられた。

ほかの回答として、まずは事務仕事を任された修了者は、「事務を遂行していくなかで、それこそ養成研修会の実習中に、何となく外から見ていた僧侶の立ち振る舞いや、看護師などの雰囲気について、以前は第三者的に外から見ていたところが、実際、そのなかに入って肌で感じることができた。（中略）今、動きやすくなって、実習がその動きやすさの基盤になってくれているのかなという思いがあります」のように、ビハラー僧ではなく、事務職員として現場に入ることによって、施設の人の動きを実感し、その後の活動につながれたと感じている修了者がいた。

また、『個別対応からではなく、法務や行事の準備をすることで人間関係が育まれていった』との回答もあり、この修了者が少しずつ組織に慣れ、組織も修了者を受け入れていった姿がうかがえる。

一方で、『引き継ぎがうまくいかず、自分の存在も周知されていない』と感じた修了者もあり、「一応、引き継ぎという形だったのですが、私が聞かなかったことも悪いのですが、実際の引き継ぎの内容は、これをしてください、します。（中略）以上、終わり。というぐらいの超特急でした。それから、じゃあ、来週からよろしくという感じであった。」と述べている。

引き継ぎが重要であるということはよく言われるが、引き継ぐ側も、引き継がれる側もどのように話をしていくのが重要であることが改めて明確に示されている。また、活動頻度によってどの程度、その組織に参画できるのかは異なって当然であるが、現状の活動権限によって修了者が不全感を感じている様子がうかがえる。

また、『今後の見通しが見つからないことに対する不安』といった声もあり、修了者が現場で大きなストレスを抱えていることがわかる。

「Q. 3 どのようなことを実践してきたのか」は、以下のような結果が得られた。

8. 【相手に寄り添ったコミュニケーション】
9. 【関係者との情報共有】
10. 【仏事を通じた実践】
11. 【環境整備によるつながりの広がり】

8. 【相手に寄り添ったコミュニケーション】では、『傾聴活動』があり、具体的には、「昼食を、患者さんと一緒に取らせてもらったりとかでコミュニケーションを取る（中略）患者さんと一緒に外を散歩したり、患者さんのお部屋に行って話をした」や、「常勤の相談員さんから直接、この人のところに行ってほしい、希死念慮があって、というおおまかな精神状態と、身体の状態を聞いて、直接依頼を受けて訪室する」といった実践がされていた。これは直接的なコミュニケーションが少しずつ始まっている様子がかがえる。

また、『何でも屋的ソーシャルワーク実践』として、具体的には、「やることは僧侶であろうが、相談員であろうが、ワーカーであろうが一緒だと思うので、肝心なのは、相手の立場に寄り添って、自分があなたの話を聞きますよという姿勢（中略）何でも屋でも、そのようなところを持っていれば、何でも屋でもいい」と述べ、医療と連携しながら、各ご家庭を訪問し、傾聴するだけでなく、様々なお手伝いをしているとのことであった。

また、『遺族ケア』の実践もあり、亡くなったご家族が再来訪され、施設スタッフとコミュニケーションがなされているようであった。

9. 【関係者との情報共有】では、『医療機関との連携』として、「傾聴であったりとか活動をして、それを病院の方にレスポンスして共有していく」という声や『カンファレンスによる情報共有』を行っていることがわかった。
10. 【仏事を通じた実践】では、『朝夕の勤行を通じた実践』があり、「お夕事の後とかでも、お参りではないが、家族さんが亡くなられたことや、奥さんが亡くなられたときの話をしてくださる」など、勤行のみならず、その前後に、死生観に関わる対話がされていることがわかった。

また、『活動の中で仏事の相談を行った』という回答もあり、「私が行っていた在宅の患者さんで、もう、あなたに頼みたいという内容を患者さんからも、家族からも言われた」とのこと。日常的な関わりの中で、こちらが布教を前提としない活動であっても、仏事の相談を受ける場合もあったとのことであった。

11. 【環境整備によるつながりの広がり】では、「様々な部屋の掃除や、花の水替えを行っていたり」や、「掲示というのを自分からしてみようと思ひ（中略）いざ、してみたら、思いのほか反応が大きくて（中略）あ、いつも絵を描いているお坊さんと言ってもらえるようになり、絵を描くキャラクターとして認知されるようになってきているらしい」など、日常の関わりを通じて、ビハーラ活動者としてつながりが広がっていることがわかった。

「Q. 4 困ったこと、負担となったことは何か」は、以下のような結果が得られた。

12. 【相手との関係性を構築するための困難さ】
 13. 【自分自身の活動に対する不安】
 14. 【組織の中で動くことの困難さ】

12. 【相手との関係性を構築するための困難さ】では、『傾聴における関係性構築』が困難であったこと、『複数人で患者へ関わることの難しさ』また、『専門職として現場にいと、

僧侶として関わるのが難しい』といったことがあげられた。

『傾聴における関係性構築』が困難であったこととして具体的には「相手から出てきたものに対して広げていこうというのは、経験といろいろな相手のライフストーリーを知っていないといけないなどの難しさはあると思います」という、相手の話を聞き、広げていくことの困難さが修了者にはあるようであった。

『複数人で患者へ関わることの難しさ』は、「私があとから入ってきて、いまさら私が行って何ができるんだろう」という戸惑いを感じた。これはすでに入居していたり、入院している相手に対して、それぞれの専門職が対応している中で、自分がどのように関わるのか、という問題とともに、すでに複数の宗教者が関わっている場合に、自分がどのように関わるのかについての疑問もあったようである。他職種の専門職がどのように関わるのか、また複数の宗教者がどのように関わるのかは、今後の課題の一つと考えられる。

『専門職として現場にいると、僧侶として関わるのが難しい』ということは、「もっとこの人のこと知りたいなと思っても、関わりきれない部分もたくさんあるかなと思います。本来の業務があり、僧侶としてここにいるわけではないので、その限界があると思います」など、自身の位置付けによって、できることの限界があることが語られていた。修了者によっては、どのような立場でも可能であると、8. 【相手に寄り添ったコミュニケーション】の『何でも屋的ソーシャルワーク実践』のところで述べている修了者もいたが、ビハーラ実践がされるうえでは、一人一人に十分な時間をかける必要があり、看護職や介護職など、その他の専門業務がある場合に並行して行う場合には、その実践形態は変わってくることを示唆された。

13. 【自分自身の活動に対する不安】では、『自身の活動に対する疑念と焦り』が見られ、修了者が実際の現場で苦しんでいる姿がうかがえた。「表面上のことしかできていないです、今は法話会と、その辺を歩いて傾聴活動」と、ある修了者は述べ、「自分は向いていないのではないか」と悩んでいた。

また、『人が亡くなるという喪失感』を感じている者もあり、「昨日コミュニケーション取れていた方が、次の日取れないとかいうのが当たり前で起きる現場であり、そういうのに、苦労というか、何とも言えないもやもやというのは常にあって」と述べていた。

さらに、『スーパービジョンそのものがしんどい』という側面があり、そのことによって学びがあるものの、そのことが修了者の負担になっていることも示唆された。

ビハーラ僧の活動そのものが人の苦難に寄り添う活動であり、さらに新しい活動であることから、その実践の負担が大きいことは当然ではあるが、その活動を推進するために、活動者自身をサポートすることも必要だと考えられる。

14. 【組織の中で動くことの困難さ】については、さらに大きく3つに分けられ、『組織の中で何を求められているのかわからない』『施設独自のルールがありその上での活動に合わせる必要がある』『宗教・福祉・医療の背景となる考え方の違いによる不理解』があげられた。

『組織の中で何を求められているのかわからない』について、具体的には、「(組織の中

で求められていることが)あまり分らないです。ずっと考えているのですが」と述べ、何をどのように情報収集すればいいのかもわからないと答えた修了者がいた。

『施設独自のルールがあり、その上での活動に合わせる必要がある』という回答の具体例は、「法話会にすごく積極的で(中略)法話会の雰囲気としてはすごくいいのです(中略)それはいいのですが、逆にそこがよすぎて、おそらく私はそれを動かすのが怖いという思いが今出てきてしまっている」と新しい活動を進めていくのが難しいと感じている修了者もいるようであった。

『宗教・福祉・医療の背景となる考え方の違いによる不理解』については、「介護職とりハビリ職でも全然違うから。知らないのに、と言われることだってある(中略)医療、介護、福祉ではないところからであったら、もっと反発をくろう可能性だってある」と述べ、宗教者としての実践の意義が伝わりにくく感じているようであった。

組織の中で動くためには、自分の位置付けを施設長などの管理職からの要請を確認することや、現場レベルでは、それぞれのその他の専門職がどのように考えているのかを把握していく必要があるが、そのような組織への合流方法は困難なポイントの一つであろう。また、宗教者の実践が、入居者や患者へのホリスティック(全人的)なケアの一つと位置付けられうるが、それが組織の中で位置付けられるためには、継続的な実践とその連携が必要であると考えられる。

「Q. 5 自身の助けになったのはどのようなことですか」では以下のような結果が得られた。

15. 【活動に関わる仲間の支え合い】

16. 【先輩への相談と助言】

17. 【自身の宗教性・死生観】

18. 【自分ができる部分があると自分を認められたこと】

19. 【宗教者の活動がより受け入れられたこと】

15. 【活動に関わる仲間の支え合い】として、具体的には、「一人なら、していないかなと思います。同期がいるということもあり、実際にいろいろな人に待っていてもらえているということもあり、私がやめるわけにもいかないし、一緒に頑張っていくという思いを持っているというのは、大事なのかなとは思いますが」と述べ、修了者の同期生や、現場の仲間関係の重要性が示された。

16. 【先輩への相談と助言】として、具体的には、「先輩に、そのことを相談したら、(中略)それはそれでいいことなんじゃない、というふうに言われて」と、自身の活動の方向性が定まることがあったとのこと。自身の活動が不安の中でされているからこそ、先輩からどのように対応するのかを支えられることは重要なことだと考えられる。

17. 【自身の宗教性・死生観】については、「宗教性とか死生観を持っていなかったら、できていないかな(中略)真宗の教えが、人生は思い通りにならない(中略)ところからスタートしているので(中略)何もできなくて当然だというところに、それは、諦めではなく、

そこに安心として、そういう居場所に帰っていけるというのが強みとして絶対ある」と述べた。生死に関わる実践であるからこそ、自身の宗教性が支えになることが重要であると考えられる。

18. 【自分ができる部分があると自分を認められたこと】については、「患者さんのお孫さんや、ひ孫さんが来たときに、先輩に、C君、行って、みたいな感じで頼まれるので。役割が与えられてよかった」という回答があった。このことからビハーラ僧養成研修会の修了者が、自らが何もできないということに対する強い葛藤をうかがうことができる。この子どもと遊ぶという行為そのものは、ビハーラ僧としては補助業務に位置付けられえると考えられるが、そのことこそが本人の無能感を低減していると考えられる。
19. 【宗教者の活動がより受け入れられたこと】については、「ビハーラ室に散歩に行きたいと言っているからお願い」とか、「付き添いしてほしいからお願いしていい」とか、「ベッドを動かすから手伝ってもらっていい」とか、そのような頼まれごとは多くなったと述べられた。この修了者の実践現場において、宗教者の役割が受け入れられることによって、実践がよりしやすくなっていったと考えられる。

「Q. 6 やりがいを感じたのはどのような時か」については以下のような結果であった。

20. 【家族から感謝される】
 21. 【生死の問題について参加者と語り合える時】
 22. 【老病死に寄り添うことのできることそのもの】
20. 【家族から感謝される】は具体的には、「(家族から) ありがとうございます、と言ってくださったのは、うれしかったです。何かできたような感覚はなかったのですが」と述べ、自身の無力さに対して、肯定的な反応があることそのものが、やりがいの一つとなっているようである。
21. 【生死の問題について参加者と語り合える時】は、「1週間ぶりに会って、先週のお話はこんなのでしたよね、と言って、法話会の前のちょっとした待ち時間とかに言ってもらえたときは、ああ、すごい、一緒にお聴聞をさせてもらっているんだなというのがあって、それはすごく充実という気持ちにはなりません」と述べ、生死の問題に対する思いが伝わったり、それに対する反応があることがやりがいになっているようである。
22. 【老病死に寄り添うことのできることそのもの】については、「お別れ会で、その人の人生を最後、人としてのいのちの最後というところに寄り添わせていただいて、本当に、まさに、仏さまになっていかれる方をお見送りできるというところに。悲しみは当然ありますが、お別れという辛さもありますが、そこに喜びを感じることもあります(中略) 宗教者として、あるべき姿なのではないかというのを、本当に毎日、きついですが、そういうことを日々のなかで感じることができるので。こういうふうに、老病死というところに宗教者が寄り添っていくということを(中略) そういう環境があるからやらせてもらえる」など、この活動そのものに意義を見出しているという回答もあった。